

Just Enough／これで十分

牧師 山本 護

ナナオサカキ（1923～2008）の詩朗読会で、バッハの無伴奏組曲から二つか三つ弾いた。「空襲警報鳴る防空壕で、これをカザルスのチェロで聴いていたよ（蓄音機で）、ありがとう」とナナオは言い、握手した。大きく、節くれ立った労働者のような掌だった。

「足に土／手に斧／目に花／耳に鳥／鼻に茸／口にはほほえみ／胸に歌／肌に汗／心に風／これで十分」。よく知られたこの詩は英語で朗読され、日本なまりの直訳で聞き取ることができた。どこにも定住せず、世界中を棲家としていたナナオサカキ。「狐には穴があり、鳥には巣がある。だが人の子には枕する所もない（マ18:20）」。イエスは御自分の境涯をこう語られたが、ナナオの詩を手引きにしてみると、その姿はいつそうはっきりしてきます。

「足に土」。「イエスはこの群衆を見て、山に登られた（5:1）」。力強い足取りでガリラヤ湖を見下ろす山にぐいぐい登り、サンダルと足には土がついている。「手に斧」。人々はイエスのことを「大工の息子ではないか（13:55）」と言い、大工は石工も兼ねているので、斧や重いハンマーを長年握っていた職人イエスのごっつい手。

「目に花／耳に鳥」。「空の鳥をよく見なさい。種もまかず、刈り入れもせず、倉に納めもしない（6:26）、野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない（6:28）」。どんなに小さなものも神は養い（6:26）、装ってくださる（6:30）。「口にはほほえみ」。「もし、それを見つけたら、迷わずにいた99匹より、その1匹のことを喜ぶだろう（18:13）」。イエスの柔らかい静かな表情が思い浮びます。

「胸に歌／肌に汗／心に風」。いろいろな場面で感じますが、たとえばこんな御言葉。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ（ヨ15:17）」。迫害され（5:16）、御自分の命が危うくなっても（5:18）、イエスは働かれる。「胸に歌」を響かせ、「肌に汗」を流し、「心に風」を吹かせて、イエスはずんずん進んで行かれる。

ヒンドゥー教の聖者ラーマクリシュナ（1836～86）はこう語りました。「体と心と口であの御方を崇めること。体では、手を合わせて拝んだり、足であの御方を祀ってある所に行ったり、耳で経や唱名の声やキールタン（楽器を伴った讃美）を聞いたり、目で聖像を拝んだりすること。心では、常日頃あの御方を瞑想し、あの御方の活動について深く考えること。口では、唱名したりキールタンを歌ったりすること（不滅の言葉）」。

林のはずれのツリーハウス「こども礼拝堂」では、足、手、目、耳、鼻、口、胸、肌、心で神を讃美したい。イエスのように、ナナオサカキやラーマクリシュナがそうだったように、創造されたあらゆる部位が自ずと神を讃美する。「Just Enough／これで十分」。Ω

